源氏物語

第十巻

玉上琢彌 訳注

角川文庫

源氏物語

第十巻　全十冊

玉上琢彌（たまがみたくや）＝訳注

角川文庫　2216

昭和五十年一月十日　初版発行
平成元年五月三十日　九版発行

発行者――角川春樹
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　編集部（〇三）八一七―八四五一
営業部（〇三）八一七―八五二一
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八

印刷所――旭印刷　製本所――本間製本
装幀者――杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ISBN4-04-402410-3　C0193

源氏物語

第十巻　全十冊

玉上琢彌（たまがみたくや）＝訳注

角川文庫　2216

凡例

一　底本は、定家自筆本の存する巻はこれを用い、存しない巻で明融摸本の存する巻はこれを用い、その他は、池田亀鑑博士の「源氏物語大成」の底本である飛鳥井雅康等筆本を用いる。貴重な典籍の使用を許された所蔵者各位に深謝する。

二　これら底本を改めた場合は、本文の右傍に＊印を付し、冊の末に表示する。注意すべき異同は、本文の右傍に＊＊印を付し、脚注欄に異文を掲げ、必要あれば括弧して訳を付した。

三　本文は仮名遣いを正し、適宜に漢字をあて、句読点を付し、会話には「　」を付して話者の名を括弧内に小字で記した。作中人物の心を述べた文にも「　」を付したことがある。すべて分かりやすくすることを主旨とし、必ずしも統一を計らず、繁雑になることを避けた。また、段落を設け、その要目を脚注欄に掲げた。

四　脚注欄は、段落ごとに要目を掲げ、注意すべき異文を＊＊印を付して掲げたほか、引き歌・故事出典・有職故実などを記し、さらに語義に及んだ。訳文で分かりにくい嫌いのあるばあい、脚注で補うように努めたのである。

五　訳文は、独立して読めるように注意したが、原文から離れすぎないように注意した。読者が原文を味わわれんことを望むからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

六　既刊の分に収録された巻を参照してほしい場合、この文庫本の頁数をかかげた。

七　文庫本は簡略を旨とするから、原文の美しさ、おもしろさの説明や、時代と背景の説明その他、省略しなければならなかった事が多い。角川書店から全巻にわたり鑑賞を書き試みた「源氏物語評釈」（全十二巻・別巻二）を刊行した。合わせ見られれば幸である。

目次

凡例　三
系図　一三

本文

浮舟　一九　本文校注　現代語訳

一　匂宮と中の宮と薫と（宮、なほかのほのかなりし夕べを）　一九　三九
二　正月、宇治より贈り物、匂宮の推察（正月のついたち過ぎたる頃）　三三　三九
三　匂宮、大内記と宇治に行く（わが御方におはしまして）　三四　三四
四　匂宮、すき見（やをらのぼりて、格子の隙あるを見つけて）　三八　三七
五　匂宮、薫のまねして入りこむ（ねぶたしと思ひければ）　三一　四〇
六　匂宮居続け、右近働く（夜はたゞ明けに明く）　三三　四一
七　女と宮との相思（例は暮らしがたくのみ、霞める山際を）　三七　四五
八　京よりの報告（よさり、京へつかはしたる大夫参りて）　三八　四七
九　帰邸した匂宮（二条の院におはしましつきて）　四〇　四八
一〇　宇治への文通（かしこには石山も止まりて、いとつれ〴〵なり）　四三　五一
一一　薫、宇治にゆく（大将殿、少しのどかになりぬる頃）　四四　五二

一二　宮中の詩会（如月の十日の程に、内に詩作らせ給ふとて）　四七　二五五
一三　匂宮、宇治に行く（かの人の御けしきにも）　四八　二五六
一四　朝、女をつれ出す（夜の程にて立ち帰り給はむも）　四九　二五七
一五　隠れ家の第二日（御物忌二日とたばかり給へれば）　五三　二六〇
一六　匂宮、帰京（かやうの帰さは、なほ二条にぞおはします）　五四　二六一
一七　女の煩悶（雨降りやまで、日ごろ多くなる頃）　五四　二六二
一八　女、匂宮の文を見る（これかれと見るもいとうたてあれば）　五六　二六三
一九　薫の文（後の御文には、「思ひながら日頃になること）　五六　二六三
二〇　匂宮への返事（宮のかき給へりし絵を、時々見て泣かれけり）　五七　二六四
二一　薫への返書（まめ人はのどかに見給ひつゝ）　五八　二六五
二二　薫、女二の宮に諒解を求める（女宮に物語など聞こえ給ひてのついでになやしともや思さむ）　五八　二六五
二三　匂宮の計画（「造りたる所に渡してむ」と思し立つに）　五八　二六五
二四　母君、宇治に来る（大将殿は、卯月の十日となむ定め給へりける）　五九　二六六
二五　薫と匂宮の使者おちあう（殿の御文は今日もあり）　六〇　二七〇
二六　薫、文を見る匂宮を見る（宮、例ならずなやましげにおはすとて）　六五　二七一
二七　薫、随身の報告をきく（夜ふけて皆出で給ひぬ）　六六　二七二
二八　薫の反省（道すがら、なほいと恐しく）　六六　二七三
二九　宇治に文をやる（われすさまじく思ひなりて捨ておきたらば）　六八　二七四
三〇　女、薫の文を返す（かしこには、御使の例より繁きにつけても）　六八　二七四
三一　右近の談言、その姉の話（まほならねど、ほのめかし給へるけしきを）　六九　二七五
三二　警固の士の言（殿よりは、かのありし返り事をだに宜はで）　七三　二七八
三三　女、死を決意（君は「げにたゞ今いと悪しくなりぬべき身なめり」と）　七四　二七九

三四 匂宮よりの文に返事せず（二十日あまりにもなりぬ。かの家あるじ） 七五 二八一
三五 匂宮、宇治に行く（宮、かくのみなほ受けひくけしきもなくて） 七六 二八一
三六 右近は会わず、侍従を呼び出す（芦垣のかたを見るに、例ならず） 七七 二八二
三七 匂宮あきらめて帰る（夜はいたく更けゆくに） 七九 二八四
三八 浮舟の思い（右近は、言ひ切りつる由言ひゐたるに） 八〇 二八四
三九 匂宮よりの文に返歌（宮はいみじきことどもを宣へり） 八一 二八五
四〇 母よりの文に返歌（京より母の御文もて来たり） 八一 二八六
四一 乳母、右近の心配（めのと、「あやしく心ばしりのするかな） 八三 二八七

蜻蛉

一、女、姿を消す（かしこには、人々、おはせぬを求めさわげど） 八四 二八八
二 右近と乳母の悲しみ（泣く〳〵この文あけたれば） 八四 二八八
三 匂宮、使者をつかわす（宮にも、いと例ならぬ、けしきありし御返り） 八五 二八九
四 時方来たって侍従と語る（かやすき人は、とくいきつきぬ） 八六 二九〇
五 乳母の嘆きに、時方事情を知る（うちにも泣く声々のみして） 八七 二九一
六 母君も来る（雨のいみじかりつる紛れに、母君も渡り給へり） 八九 二九二
七 右近と侍従、母君らに事情を語る（侍従などこそ、日ごろの御けしき） 九〇 二九三
八 葬送のまね（大夫舎人など、おどし聞こえし者どもも参りて） 九二 二九五
九 右近の恐れ（かゝる人どもの言ひ思ふことだにつゝましきを） 九二 二九五
一〇 薫、石山参籠、宇治に使者（大将殿は、入道の宮のなやみ給ひければ） 九三 二九六
一一 薫の後悔（殿は、なほいとあへなくいみじ、と聞き給ふにも） 九四 二九七
一二 匂宮の嘆き（かの宮はた、まして二三日はものもおぼえ給はず） 九五 二九八
一三 薫、匂宮を見舞う（宮の御とぶらひに、日々に参り給はぬ人なく） 九六 二九八

一四 薫、宇治の女の話をする（やう〳〵世の物語きこえ給ふに） 九七 二九九
一五 薫の反省（「いみじくも思したりつるかな。いとはかなかりけれど） 九九 三〇一
一六 四月、時鳥に、薫と匂宮との贈答（月たちて、「今日ぞ渡らまし」と） 一〇〇 三〇二
一七 匂宮、中の宮に打ち明ける（女君、このことのけしきは） 一〇〇 三〇二
一八 匂宮、時方を宇治につかわす（いと夢のやうにのみ） 一〇一 三〇三
一九 侍従、右近に代わって出京（大夫も泣きて、「さらに） 一〇二 三〇四
二〇 匂宮、侍従と語る（宮は、この人参れりと聞こし召すも） 一〇三 三〇五
二一 匂宮、侍従に贈物（なにばかりの者とも御覧ぜざりし人も） 一〇四 三〇六
二二 薫、宇治に行き、右近と語る（大将殿も、なほいとおぼつかなきに） 一〇五 三〇六
二三 薫の諒解（かうぞ言はむかし、しひて問はむもいとほしくて） 一〇九 三一〇
二四 薫、宇治を去る（あさり、今は律師なりけり） 一一〇 三一一
二五 薫、女の母に使者をつかわす（かの母君は、京に子生むべきむすめの） 一一一 三一一
二六 常陸の守、事情を知る（かしこには、常陸の守、立ちながら来て） 一一三 三一四
二七 四十九日の法事（四十九日のわざなどせさせ給ふにも） 一一四 三一四
二八 その後の匂宮と薫（ふたりの人の御心のうち、古りず悲しく） 一一五 三一五
二九 一品の宮づきの小宰相と薫（后の宮の、御軽服の程は） 一一六 三一五
三〇 中宮、六条の院で法花八講（はちすの花の盛りに、御八講せらる） 一一七 三一七
三一 西の渡殿の女一の宮を、薫すき見する（いつかといふ朝座にはてゝ） 一一八 三一七
三二 薫、女二の宮を女一の宮と比較する（つとめて、起き給へる女宮の） 一二〇 三一九
三三 薫、中宮に参上、匂宮を見る（その日は暮らして、またのあしたに） 一二一 三二一
三四 薫、女一の宮に近づこうとする（大将も近く参り寄り給ひて） 一二二 三二一
三五 中宮方で宇治のうわさ（姫宮は、あなたに渡らせ給ひにけり） 一二四 三二三
三六 薫の反省（そののち、姫宮の御方より二の宮に御消息ありけり） 一二六 三二五

三四 匂宮、侍従を中宮に出仕させ（心のどかに、さまよくおはする人だに）一二七 三二六
三五 式部卿の宮の姫、女一の宮の侍女となる（この春うせ給ひぬる式部卿の宮の御むすめを）一二八 三二七
三六 六条の院での中宮の生活（この院におはしますをば）一二九 三二八
三七 秋、侍従、薫と匂宮を見る（涼しくなりぬとて、宮、内に参らせ給ひ）一三〇 三二八
三八 薫、東の渡殿に女房と語る（東の渡殿に、あきあひたる戸口に人々）一三一 三二九
三九 夜、薫、西の渡殿に女房と語る（例の西の渡殿を、ありしにならひて）一三四 三三三
四〇 薫、宮の君と語る（宮の君は、この西の対にぞ御方したりける）一三五 三三四

手習

一 横川の僧都の母尼、長谷参詣（その頃、横川に、なにがし僧都とか）一三八 三三七
二 帰途発病、僧都下山、宇治の院に宿る（ことども多くして、帰る道に）一三八 三三七
三 僧都、宇治の院に怪を見る（まづ僧都渡り給ふ。いといたく荒れて）一三九 三三八
四 僧都、人と見て、助ける（僧都、「まことの人のかたちなり）一四一 三四〇
五 僧都の妹尼、介抱に努める（御車寄せて降り給ふ程）一四三 三四一
六 八の宮の姫の葬送のうわさ（二日ばかり籠りゐて、二人の人を）一四五 三四三
七 一行、小野に帰る（尼君、よろしくなり給ひぬ。方もあきぬれば）一四六 三四四
八 女、回復せず（かゝる人なむ率て来たるなど、法師のあたりには）一四六 三四四
九 僧都、下山して加持する（うちはへかくあつかふ程に、四五月も）一四七 三四五
一〇 女、回復し、回想し、出家を望む（さうじみのこゝちはさわやかに）一四九 三四七
一一 尼の不安（夢のやうなる人を見奉るかな、と、尼君は喜びて）一五一 三四九
一二 小野の秋（昔の山里よりは、水の音もなごやかなり）一五三 三五〇
一三 尼の婿、中将来る（尼君の昔の婿の君、今は中将にて物し給ひける）一五五 三五二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

一四 中将、横川に登り、弟の禅師と語る（中将は、山におはしつきて）
一五 中将、帰途ふたたび立ち寄る（又の日帰り給ふにも）
一六 中将、小鷹狩のついでに立ち寄る（ふみなどわざとやらむは）
一七 中将の歌に、女こたえず（入りても、「なさけなし」）
一八 中将の笛に、大尼君和琴をひく（こゝかしこうちしはぶき）
一九 中将の文に、尼の返歌（これにことみなさめて、帰り給ふ程も）
二〇 尼君、初瀬参詣（九月になりて、この尼君初瀬に詣づ）
二一 留守の人々（しのびてといへど、皆人したひつゝ）
二二 中将、来訪（月さし出でてをかしき程に、昼文ありつる中将）
二三 母尼の部屋に逃げこむ（「あやしきまで、つれなくぞ見え給ふや」）
二四 半生を回想（昔よりの事を、まどろまれぬまゝに）
二五 僧都、下山（げす〳〵しき法師ばらなどあまた来て）
二六 出家を望む（立ちて、こなたにいまして、「こゝにやおはします」とて）
二七 剃髪（はさみとりて、櫛の箱の蓋さし出でたれば）
二八 人々うらむ（みな人々出で静まりぬ。夜の風の音に）
二九 手習い（つとめては、さすがに人の許さぬことなれば）
三〇 中将の歌に返歌（同じすぢのことを、とかく書きすさびゐ給へるに）
三一 帰宅した尼君の悲嘆（物語の人帰り給ひて、思ひ騒ぎ給ふこと）
三二 一品の宮の御病気回復（一品の宮の御悩み、げにかの弟子の）
三三 僧都、中宮に、宇治の女発見を語る（御物の怪の執念きこと）
三四 僧都、帰途、小野に寄る（姫宮おこたり果てさせ給ひて、僧都も）
三五 中将、尼姿をかいま見る（いふかひなき人の御事を）
三六 中将、世話を申し出る（世の常のさまには思し憚る事もありけむを）

一六〇 三五六
一六一 三五七
一六二 三五八
一六三 三五九
一六六 三六〇
一六八 三六一
一六九 三六三
一七〇 三六四
一七二 三六五
一七三 三六六
一七五 三六七
一七六 三六九
一七七 三七〇
一七九 三七一
一八一 三七三
一八二 三七四
一八三 三七五
一八四 三七六
一八五 三七七
一八七 三七九
一八八 三八一
一九〇 三八二

三三 出家後の女（思ひよらずあさましき事もありし身なれば） 一九一 三八三
三六 新年の小野（年もかへりぬ。春のしるしも見えず） 一九一 三八三
三七 大尼君の孫、紀伊の守来訪（大尼君の孫の紀の守なりける） 一九三 三八五
三八 薫のうわさ話（また言ふやう、「まかりのぼりて日ごろになり侍りぬるを） 一九三 三八五
四一 宇治の一周忌の布施の仕立て（「忘れ給はぬにこそは」と） 一九五 三八七
四二 薫、女の遺族の世話をする（大将は、このはてのわざなどせさせ給ひて） 一九七 三八八
四三 薫、明石の中宮に宇治の話をする（雨など降りてしめやかなる夜） 一九七 三八八
四四 中宮の命で、小宰相、薫に僧都の話を伝える（小宰相に、しのびて） 一九八 三八八
四五 薫、中宮と語る（「あさましうて失ひ侍りぬと思ひ給へし人） 二〇〇 三八九
四六 中堂に行き、横川の僧都を訪おうと思う（月ごとの八日は、必ず） 二〇一 三九一

夢浮橋

一 薫、叡山参詣。翌朝横川に行く（山におはして、例せさせ給ふやうに） 二〇三 三九三
二 横川の僧都に女のことをきく（少し人々しづまりぬるに） 二〇三 三九三
三 小野の尼、薫の行列の火を見る（小野には、いと深く茂りたる） 二一〇 三九九
四 薫、小君を小野にやる（かの殿は、「この子を、やがてやらむ」と） 二一〇 三九九
五 小野に僧都より文（かしこには、まだつとめて、僧都の御もとより） 二一一 四〇〇
六 小君、小野に来る（あやしけれど、「これこそは、さは確かなる） 二一二 四〇〇
七 小君の報告に、薫、失望（いつしかと待ちおはするに） 二一八 四〇六

校異　三一九
補注　三三五
年立　四〇七
索引　四一六
源氏物語絵引き　四三一
「源氏物語絵引き」索引　四七〇

うきふね

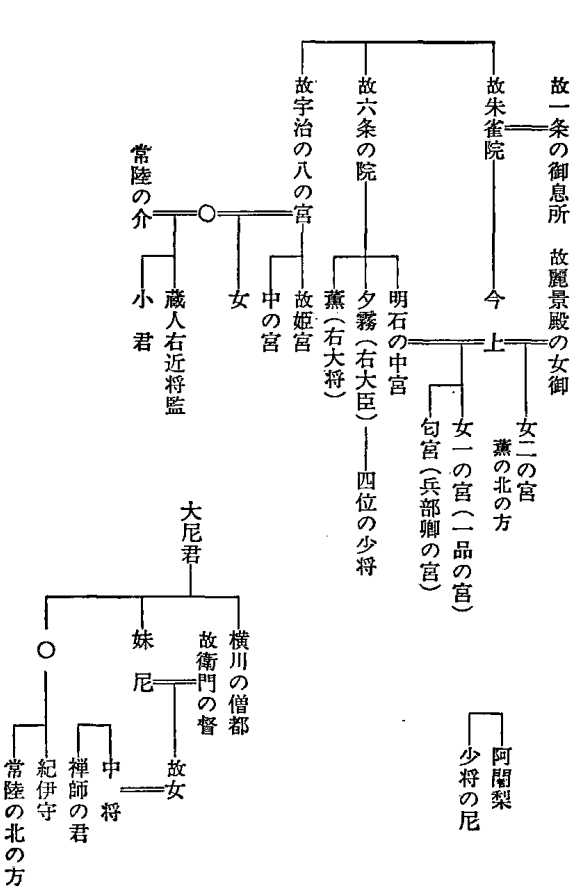
- 故朱雀院（母弘徽殿大后）
  - 今上
    - 故麗景殿女御
      - 女二の宮（薫北の方）
    - 女一の宮（一品の宮）
    - 匂宮（兵部卿の宮）
- 故六条の院（母桐壺更衣）
  - 明石の中宮（后、大宮）（母明石の御方）
    - 六の君
  - 夕霧（右大臣）（母葵の上）
  - 薫（右大将）（母朱雀院女三の宮）
- 故宇治の八の宮（母女御）
  - 故姫宮
  - 中の宮（宮の御方）
- 故大臣
  - 故北の方
    - 中将の君
      - 女
    - 常陸の介
      - 女
      - 左近少将
  - 故柏木の乳母
    - 弁の尼
    - 故左中弁

- 大蔵大夫仲信
  - 女
    - 大内記道定
- 匂宮の乳母
  - 時方（出雲権の守）
- 因幡の守
  - 右近の大夫
    - 女
    - 内舎人

かげろふ

- 麗景殿の女御
  - 今上（時の帝）
    - 女二の宮（薫の北の方）
    - 東宮
    - 女一の宮（一品の宮）
    - 二の宮（式部卿の宮）
    - 匂宮（兵部卿の宮）
    - 明石の中宮
      - 夕霧（右大臣）
      - 薫（右大将）
      - 母朱雀院の女三の宮
  - 女三の宮（入道の宮）
- 故朱雀院
- 故六条の院
- 式部卿の宮
  - 北の方
  - 侍従宮の君
- 継母の北の方
  - 右馬の頭
- 故宇治の八の宮
  - 故姫宮
  - 中の宮
  - 女
  - 常陸の介の北の方

てならひ・ゆめのうきはし



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor